

ドクササコ

[概要]

9～10月（まれに春）にかけて竹林や笹やぶ、雑木林に群生し、束生するものが多い。主に近畿、北陸、東北地方、長野県北部に分布する。傘は径5～10cm、淡橙黄色、のち茶褐色、浅い漏斗形で表面は平滑で湿時やや粘性がある。ひだは黄白色で、のち淡黄褐色になり、密で柄に垂生する。

カヤタケ属であるドクササコは、通常安全な食菌とされているカヤタケやその近縁種に似ており、間違えて食べる事故が起こっている。食べてから普通3～7日経過してから症状がでるため、かつては秋になると発生する風土病と信じられていた。このキノコからは、クリチジン、アクロメリン酸A、Bが分離されているが、どの成分がドクササコ中毒の症状を発現するか、その毒性について十分には解明されていない。 1) 2)

[毒性]

種差がある。

致死量

粗エキス：マウス腹腔内 1.5g / Kg 2)

[症状]

症状の推移 2) 5)

摂取 6～24 時間後：胃の違和感、嘔気、全身倦怠感、目の異物感。

摂取 24 時間前後：歯を噛むと“チャリ、チャリ”した感じがする。

摂取 2～4 日後：指趾のこわばり感、しびれ感、灼熱感、
手、指、下肢の発赤、腫脹、疼痛

摂取 5 日～2 週間後：疼痛が増強し、6 日目頃までピークに達し、
10～20 日目頃まで持続する。疼痛はひどく、
手足の指先に焼火箸を刺されるかのような激痛。

摂取 2 週間～3 ヶ月後：上記症状は、15 日目ごろから軽減し、30～50
日で消失する。疼痛が消失したのちでも手足
を温めたときにしびれ感が出現することがあ
り、これは 90～100 日目ごろまで持続する。

ドクササコの摂取量の多少によって発現する症状に差がある。

他の毒キノコとは異なり強い消化器症状はない。

皮膚に触れたり、四肢を温めると疼痛が増強する。

[処置]

家庭で可能な処置

3)

催吐（ただし乳幼児の場合、吐物を気管内に吸い込むことがあり、注意が必要）

医療機関での処置

2)3)4)

基本的処置：摂取後短時間であれば、催吐、胃洗浄、吸着剤と下剤投与。

対症療法：疼痛対策；アスピリン、モルヒネなどの麻薬は無効。

局所麻酔薬による硬膜外神経ブロックは有効。

四肢を冷たい水に浸すと痛みが緩和されるが、

長時間行なうと四肢末端に凍傷、感染を起こす。

冷湿布が効果あると思われる。

特異的な治療法：血液灌流、血液透析；毒成分の除去に有効だと思われる。両者の併用で症状の改善がみられた報告がある。

補助療法：ニコチン酸（+ATP）の点滴静注が症状を軽減したという報告がある。

[確認事項]

きのこの種類：採取場所、種類、形態など

摂取時間：何時間経過しているのか

摂取量：食べた個数を確認

きのこを食べてから2～4日後に突然指趾の関節に熱感を伴う痛み、こわばり、しびれが現れたら、ドクササコ中毒を疑う

[情報提供時の要点]

なんらかの中毒症状が出ていれば、直ちに受診を指示

摂取後、中毒症状が出るまでの時間が長いので、長期にわたり注意が必要。

[体内動態]

明らかではない。

1)

[中毒学的薬理作用]

作用機序は未だ明らかではないが、クリチジンによる血管拡張作用や多発性末梢神経障害、副交感神経機能更新状態などが考えられる。 1)

アクロメリン酸A,Bは脳脊髄にある興奮性のグルタミン酸受容体のうち、カニン酸型のものを強く刺激する。 3)

[その他]

6時間以上水に浸したドクササコをみそ汁にして食べても発症しないか軽症であること、みそ汁にしたドクササコだけを食べ、汁を飲まなかった場合には、発症しないか軽症であることから、毒成分は水溶性で100程度の熱には安定な物質と考えられる。 2)

[別 名]

ヤブシメジ、ヤケドタケ

[参考文献]

- 1) 横山和正他：日本の毒キノコ 150 種 (1992)
- 2) 山下衛他、古川久彦：きのこ中毒 (1993)
- 3) 内藤裕史：中毒百科改訂第 2 版 (2001)
- 4) 白川健一、他：新潟医学会雑誌、94、11、745～753、(1980)
- 5) 今関六也：野外ハンドブック・3きのこ(1982)